

「VR 構造」に関する日中比較研究

与“VR 结构”有关的汉日语比较研究

要旨

周知のように、中国語と日本語は異なる種類の言語で、両言語における統語構造に対する比較はそう簡単ではない。たとえば、中国語の補語に相当する表現は連用修飾語もあれば一部の複合動詞及び他の形式もある。本論は補語の中の「VR 構造」を取り上げ、そのメカニズムを解明する。補語の教育と修得における諸問題を解決するように理論的な規則をまとめようとする研究である。上述の研究目的を達するため、本論では様々な動詞+補語の多くの組み合わせについて、それぞれの規則を帰納し、各種の動詞と各種の補語の構造に相当する日本語の形式を考察した。本論は緒論のほか、計五章により構成されている。

緒論で関係あるいくつかの基本概念を説明し、動補関係の構成を簡単に説明した上、先行研究をまとめ、自分の見解を述べた。それと同時に、動詞や形容詞が結果補語になる際の意義指向について具体的な用例で研究の現状を分析した。その後、本論の研究方法を説明した。まず先行研究を踏まえ、動詞と補語を各角度より系統的な全面研究で行い、その後、特定の動詞と特定の補語の組み合わせによるそれぞれの意味を考察した。その後、日中両言語における相違点について、中国語の教育者と学習者が参考にできるように実施方法を提案した。

第一章は、結果補語になる動詞、形容詞に対する考察を別々に行った。今までの認定された結果補語をさらに分類した。その結果は以下の通りである。1、終結補語、2、予期補語、3、達成補語、4、位移補語、5、認知結果補語、6、顔色補語、7、変化補語、変化補語の中の 8、心理変化補語、9、生理変化補語、10、変形補語、11、量変補語、12、質変補語を含むである。

第二章は、「VR 構造」の V に対して伝統的な分類にさらに細かく分類し、主に 1、動程 V、2、自主 V、3、産出 V、4、数量変化 V、5、形状変化 V、6、状態変化 V、7、顔色変化 V、8、性質変化 V、9、認知 V、10、移動 V、11、感情寄与 V などの 11 種類に分類した。その中に、どの動詞でも感情寄与動詞になれることを指摘した。また、自主 V の量が比較的が多いが、産出 V の量が最も少なく、“盖、搭、建、砌”などの動詞は、建物と組み合わせしかできないことを指摘した。

第三章は、第一章と第二章の分類を利用し、VR と共に現れる関係を考察した上、以下の結論を結んでいた。1、動程 V+終結 R、2、動程 V+達成 R；3、自主 V+終結 R、4、自主 V+

予期 R、5、自主 V+達成 R；6、産出 V+終結 R、7、産出 V+達成 R；8、数量変化 V+終結 R、9、数量変化 V+予期 R、10、数量変化 V+達成 R、11、数量変化 V+心理変化 R、12、数量変化 V+量変 R；13、形状変化 V+終結 R；14、状態変化 V+生理変化 R；15、顔色変化 V+終結 R；16、顔色変化 V+予期 R、17、顔色変化 V+達成 R、18、顔色変化 V+顔色 R；19、性質変化 V+達成 R；20、認知 V+終結 R、21、認知 V+達成 R、22、認知 V+予期 R、23、認知 V+心理変化 R、24、認知 V+量変 R、25、認知 V+認知結果 R；26、移動 V+終結 R、27、移動 V+位移 R、28、移動 V+予期 R。

第四章は、よく見られる VR 構造について、日中両言語の比較を行う。「動程 V+終結 R」と日本語の対応形式については、主に以下のようにになっている。「V+終わる、(き)ちゃんと V、V 上げる」、前者は統合型複合語に属し、「V あげる」は複合動詞である。「自主 V+予期 R」組み合わせということは、動作を発生した以後、その結果に対する評価をである。それに相当する日本語の表現には「V すぎる」、「V+間違える/間違えない」、「反対に V」、「逆さまに V」、「V+曲がる」、「外れる」などである。産出 V の数は少ないので、組み合わせの補語も少なく、達成 R としか共現できず、建築物の産出を表す。日本語の「出来上がる」に相当する。「数量変化 V+量変 R」の組み合わせは数量の変化を表す。日本語に相当しているのは「V しまう」、「V1+ V2」、「きれいに+V」、「一杯 V」などが相当している。「形状変化 V+変形 R」の組み合わせに相当するのは「V1+ V2」「V1_て+ V2」である。“抽小了”のような中国語動補構造が必要である。日本語で一つの単語「縮む」が対応できる。「顔色変化 V+顔色 R」は色の変化を表すが、日本語に相当するのは「顔色+に+V」、「顔色+V+しまう」である。「性質変化 V+成/为」は A 状態から B 状態になることを表して、日本語の「に V」に相当する。「状態変化 V+生理変化 R」の組み合わせは、生命体が動作による生理変化と現象を表す。「認知 V+認知結果 R」は、脳などの人体器官を通じて産出された結果を表すが、日本語で「はっきり V」、「V+わかる」、「V+理解できる」に対応する。「移動 V+位移 R」は、位置の移動を表すが、日本語の「V1+ V2」「V1_て+ V2」に対応する。どの動詞でも、感情寄与動詞になれても、それに組み合わせる補語が多くない。それらの動詞は、心理変化の R しか組み合わせることができず、日本語の「V+飽きる」または「すっかり+V」に対応する。

本論の研究を通じて以下の結論。(1) VR 構造の V を：1 2 種類に再分類できるが、その中で認知 V の通用範囲が最も広く 6 種類の補語と組み合わせ、文法化の程度が高いと思われる。一方、形状変化 V、状態変化 V は終結 R と心理変化 R としか組み合わせることができず、語彙化の程度が高いと思われる。(2) 補語になれる動詞と形容詞 1 1 種類に分けるが、終結補語の文法化程度がもっとも高く、「動程 V、自主 V、産出 V、数量変化 V、形状変化 V、顔色変化 V、認知 V、移動 V」と組み合わせることができる。そのほか、「位移 R」の「共現範囲」が狭く、「移動 V」としか組み合わせない。「顔色 R」は「顔色変化 V」としか組み合わせない。「認知結果 R」は「認知 V」としか組み合わせない。「変形 R」は「形状変化 V」と組み合わせる。これらの補語は語彙化程度が高いと考えられる。(3)「VR 構造」に相当する日本語の形式は主に“統語复合動詞”である。「動程 V+終結 R」は日本語の「V+終わ

る、V 上げる」に相当する。「自主 V+予期 R」は、「V すぎる」に相当する。感情寄与 V に、心理変化の R しか組み合わせないが、日本語の「V+飽きる」または「すっかり+ V」に相当する。また、日本語の複合動詞に相当するのは：産出 V+達成 R：出来上がる；形状致変 V+変形 R：V1+V2；移動 V+位移 R：V1+V2。日本語の連用修飾語に相当するのは：形状致変 V+変形 R：V1 て+V2、移動 V+位移 R：V1 て+V2。

本研究は中国語の「VR 構造」及び日本語との相当表現についての初歩的な考察で、考察の範囲、分析の方法、理論的な論述と帰納とも不十分である。今後の課題としてさらに深く研究を進めたいと思う。

キーワード：VR（動補）構造 補語（R） 動詞（V） 共現 日中比較 語義指向